7月7日に生まれて

あらすじ

※視聴者参加型を志向した脚本となります。
※登場人物の？（??）は視聴者を指します。

7月7日。階層世界の最深部に住む秋山（25）は、最高層に住む恋人に今年も会いにゆく。

この世界には無数の階層が存在しており、階層間を越えるには、中間層に住む者たちの協力が必要だった。

飯田（38）をはじめ、中間層の人間たちは秋山のために愛の言葉を叫ぶ。愛がエネルギーに変わり、秋山を最高層へと近づかせるのだった。

多くの者たちの協力を得て、秋山は無事恋人との再会を果たし、束の間の逢瀬を楽しむ。

秋山が最深部へ帰還するさい、トラブルが起こる。？（??）の住む第46階層に秋山の魂が取り残されてしまったのだ。

帰還できるタイムリミットが迫る中、秋山の魂を送り返すための方法が一つだけあった。それは、？が意中の相手に愛の告白をする、というものだった。

戸惑う？だったが、秋山を救うため、思いを寄せる相手にSNSで愛のメッセージを送る。

？が生んだ愛の力によって秋山の魂は無事に元の世界へ返ってゆくが、告白の結果については？のほか誰も知る者はなかった。

《登場人物》

秋山（25）　最深部の住人

？（??）　第46階層の住人

飯田（38）　第2階層の住人

立浪（28）　第3階層の住人

ゆら（18）　第4階層の住人

ペドロ＝マルティネス（50）　第45階層の住人

その他

○暗闇

小さな穴が中央に現れ、光が射し込む。

穴、ゆっくりと広がっていく。

○秋山の部屋

穴の向こうに秋山（25）の顔。

穴、完全に開ききり、画面全体に秋山の部屋が映し出される。

※以下、全場面において物語は穴から見た視点で進行する。

※穴は作中に登場する全ての部屋に存在し、かつ、どの部屋においても天井付近の壁に位置するものとする。

秋山、天井付近の穴を見上げながら、

秋山「（カメラ目線で）手短に話す。今、俺はこの穴を通して君に話しかけている」

秋山、穴を指さし、

秋山「テレビの前に座っている君だ。君」

とカメラ目線でまじまじ見る。

秋山「戸惑うのはわかるが、説明がめんどくさい。要点は二つだ。一つ。俺はこれから恋人のりなのもとへいく。今日は7月7日。遠距離恋愛の俺たちは、織り姫と彦星のごとく一年に一度、七夕の日に会おうと、そう誓いを立ててる」

秋山、穴へ向かってしゃべり続ける。

秋山「二つ。俺や君の住むこの世界には無数の階層が存在する。悲しいことに俺とりなは住む階層が違う。俺は最深部。りなは最高層にいる。つまり、俺と恋人の間にはたくさんの世界が存在してるってわけだ。いいか。今話した二つの要点を頭に叩き込んでほしい」

秋山、穴から背を向け、机へ歩き出す。

机の上にアンパンマンのブリキ人形が置かれている。

秋山、穴を振り返って、

秋山「とはいってもわからないだろうから、毎年やってる説明をする」

秋山、アンパンマン人形を手に取ると、人形の頭と胴体を切り離す。

半分に割ったアンパンマン人形の中にメロンパンナの人形が入っている。

秋山「(穴に見て)見えるか？　マトリョーシカだ」

秋山、今度はメロンパンナを半分に割る。

メロンパンナから食パンマンが出てくる。

秋山、人形を出す作業を繰り返し、カレーパンマン、ジャムおじさん、最後にミニチュアサイズのチーズが出てくる。

秋山、机の上にそれらの人形を一列に並べる。

秋山「この世界はこのマトリョーシカのようなものだ。恋人の住む最高層は一番外側のアンパンマン。俺のいる最深部は一番内側のチーズ。チーズがアンパンマンに会うためには、ジャム、つまり、君の住む世界や、さらにはカレーや食パンを経由しなくてはならないってことだ」

秋山、マトリョーシカ人形を元に戻しながら、

秋山「説明は以上だ」

秋山、マトリョーシカ人形を元に戻す。

秋山、穴の下にいく。

秋山「（穴を見上げ）最後に一つ。今から俺はこの穴を通して君のもとにいくが、俺がそっちにいったら、君に協力してもらいたいことがある。頼んだぞ」

秋山、目を閉じる。

秋山、深く息を吸い、

秋山「（叫ぶ）りな、愛してる！」

○飯田の部屋

質素なワンルーム。

飯田（38）、ぽかんとした顔でテレビの前に座っている。

テレビ画面には天井付近から見下ろすアングルで秋山の部屋が映し出されている。

秋山の部屋に秋山の姿はない。

秋山「おい」

飯田、振り向く。

後ろに、秋山、立っている。

飯田、仰天する。

秋山「いったろ？　今から君のもとにいくと」

飯田「え？」

秋山「俺の説明を聞いてなかったのか？」

飯田「え、いや、部屋にいたら急にテレビがついて…」

秋山「そのテレビが俺と君の階層を繋ぐ通路の役割を果たしている。ちなみにだが、この部屋も次の階層と繋がっている」

秋山、天井付近にある穴を見上げ、カメラ目線になる。

秋山、穴を指さす。

秋山「君には見えないが、あそこに穴、つまり、通路がある」

飯田「え？」

飯田、秋山が指したほうを見る。

きょろきょろする飯田へ、

秋山「違う。もう少し右だ」

飯田、やっとカメラ目線になる。

秋山、困惑する飯田へ、

秋山「予告したように君に頼みがある」

飯田「…？」

秋山「俺はこれから恋人に会いにいく。それにはいくつもの階層を超える必要がある。わかるな？」

飯田「…はあ」

秋山「階層を超えるには愛のエネルギーが必要なんだ。さっき俺が愛してると叫んだのを聞いたろう。あれと同じことを君にもやってほしい」

飯田「え？」

秋山「次の階層にいくためには今いる階層の住人の愛が不可欠なんだ」

飯田「…」

秋山「愛の言葉を叫んでほしい」

飯田「え」

秋山「頼む」

飯田「え。いえばいいんですか？」

秋山、目をつぶる。

秋山「…ああ。頼む」

飯田「え。す、好きです。え？」

秋山、目を開ける。

秋山「…やる気あるのか？」

飯田「いえ、でも、なんか…」

秋山「君は独り身か？」

飯田「あ、単身赴任中でして、妻とは離れて暮らしてて…」

秋山「奥さんを思い浮かべて叫んでくれ。愛してるんだろ？」

飯田「…どうですかね」

秋山「愛してるはずだ」

飯田「…はい」

秋山、目を閉じる。

秋山「…叫べ」

飯田「…あ、愛してる」

秋山「もっと！」

飯田「あ、愛してる！」

秋山「もっと大きな声で！」
飯田「愛してる！」
秋山「もっと！」
飯田「愛してる！」
秋山「もっと！」
と、隣室から壁ドン。
飯田「…」
秋山「（目を開け）続けてくれ」
飯田「いや、でも隣が…」
秋山「待ってろ」
秋山、出ていく。
ややあって、
隣人の声「（断末魔）うわああああああああああああああああああああああああああああああああああああ」
飯田「…」
秋山、戻ってくる。
秋山「叫べ」
飯田「…あ、愛してる！」
秋山「もっと！」
飯田「愛してる！！」

秋山「もっと！」
飯田「愛してる！！！」
秋山「もっと！」
飯田「愛してる！！！！」

○立浪の部屋
小汚いワンルーム。
立浪（28）、テレビの前に座っている。
テレビ画面に飯田の部屋が映し出されている。
画面内に飯田の姿。
飯田「…き、消えた？！」
飯田、きょろきょろ部屋を見渡している。
秋山「…愛を叫んでほしい」
立浪、驚いて振り返る。
秋山が立っている。
立浪、絶句する。
秋山「…どうした？」
立浪「え」
秋山「一部始終、見てたんだろう」

立浪「（おどおどと）あ、はい」

秋山、テレビ画面に映る飯田を指し、

秋山「俺がチーズ。アイツがジャムで、お前がカレー。そういうことだ」

立浪「あ、はい」

秋山「わかったら協力してくれ」

立浪「あ、はい」

秋山「返事はいい。叫べ」

立浪「あ、はい。すみません」

秋山「叫べよ！」

立浪「あ、すみません」

秋山「バカにしてんのか？！」

立浪「…」

秋山、壁に貼られたポスターに目がいく。

アイドルグループ「乃木坂 3」のポスターで、生駒と白石と西野のスリーショット。

秋山「…乃木坂、好きなのか？」

立浪「…あ、はい」

秋山「一つ教えてやる。自分がどの階層の人間かは、乃木坂のグループ名でわかる。ここ

は第３階層だから乃木坂３ってわけだ」
立浪「…」
秋山「次の第４階層ではメンバーが一人増えて乃木坂 4。ちなみに俺の世界では乃木坂のメンバーは生駒ちゃんだけだ」
立浪「(俄に興味をもって)え。そっちの世界、まいやんとななせまるいないんすか？」
秋山「やっと会話になった」
立浪「…」
秋山「叫べ」
立浪「…」
秋山「乃木坂、好きなんだろ？」
立浪「…はい」
秋山「生駒ちゃんへのありったけの愛を叫べ」
立浪「あ、自分、まいやんです」
秋山「誰でもいい。叫べ」
　立浪、大きく息を吸って、
立浪「あ、あ、あ愛してる！」
秋山「もっと！」
立浪「愛してる！」

秋山「もっと気持ちをこめて！」
立浪「愛してる！」
秋山「思いをぶつけろ！」
立浪「まいやん！　愛してる！」
秋山「もっとだ！」
立浪「まーーーーい！」
秋山「もっと！」
立浪「むぁーーーーーーーーーーい！」

○ゆらの部屋

ぬいぐるみがたくさん飾られた室内。
ゆら（18）、秋山の前に呆然と立っている。
秋山の体、うっすら透けている。
秋山「どうした？　一部始終、見てたんだろ？」
ゆら「え、いえ…か、体が…」
秋山、透けた自分の体を見て、
秋山「（平然と）これか。問題ない。階層が遠のくにつれこうなる。最終的には魂だけが向こうにいく」
ゆら「…」

秋山「君がやるべきことはわかるな？」

ゆら、息を吸って、

ゆら「（がむしゃらに）あ、愛してる！　愛してる！　愛し」

秋山「（遮る）待て！」

ゆら「愛してる！　愛してる！　愛して…」

秋山「食パン！（と咎める）」

ゆら、叫ぶのをやめる。

秋山「俺にも準備がある」

秋山、深呼吸をする。

秋山、目を閉じる。

秋山「…よし。叫べ」

ゆら「愛してる！」

秋山「もっと！」

ゆら「愛してる！」

秋山「もっと！」

ゆら「愛してる！」

秋山「もっと！」

ゆら「愛してる！」

秋山「もっと！」

ゆら「愛してる！」
秋山「もっと！」
ゆら「愛してる！」
秋山「もっと！」
ゆら「愛してる！」

以下、カットバック

○第５階層の住人の部屋
若い男と秋山、立っている。
男「愛してる！」

○第６階層の住人の部屋
若い女と秋山、立っている。
女「愛してる！」

○第10階層の住人の部屋
カップル、ベロちゅうしている。
秋山、見ている。
秋山「（けしかける）もっと激しく！」

カップル、さらにベロちゅう。

秋山「もっと！」

○第13階層の住人の部屋

老女と秋山、立っている。

老女「愛してる！」

○第17階層の住人の部屋

少年と秋山、立っている。

少年「愛してる！」

○第20階層の住人の部屋

中年男と秋山、立っている。

中年男「愛してる！」

隣から壁ドン。

×　×　×

隣人の声「（断末魔）うわああああああああああああああああああああああああああ」

○第23階層の住人の部屋

年増の女と秋山、立っている。

秋山の体、ますます透けてきている。

年増の女「愛してる！」

○第30階層の住人の部屋

男と秋山、立っている。

男「やりたい！」

○第33階層の住人の部屋

女と秋山、立っている。

女「やりたい！」

○第36階層の住人の部屋

男と秋山、立っている。

男「やりたい！」

○第39階層の住人の部屋

カップル、セックスしている。

秋山、見ている。

カットバック、おわり

○マルティネスの部屋

壁に「乃木坂45」のポスター。

ペドロ＝マルティネス（50）、秋山と向き合っている。

秋山の体、消えかけてる。

マルティネス「（流暢な日本語で）大丈夫すか？　ほとんど消えかけてますけど」

秋山「次の階層で肉体は完全に消えるかもしれんが、問題ない」

マルティネス「あの、次の階層の通路って、どこっすか？」

マルティネス、きょろきょろと室内を見回す。

秋山、天井付近の穴を指さす。

マルティネス、穴の近くに向かって忙しなく目線を動かす。

秋山「ちがう。右だ…もう少し下…もっと上…そこだ」

マルティネス、ようやくカメラ目線になる。

マルティネス「（興奮して）この向こうに乃木坂46が存在する世界があって、その住人が俺を見てるんすね？」

秋山「世間話はおわりだ。叫べ」

マルティネス「（威勢よく）愛してる！」

秋山「もっと！」

マルティネス「愛してる！　愛してる！　愛してる！　愛してるーーー！」

秋山、室内から消える。

マルティネス「き、消えた？！」

マルティネス、隈無く室内を見渡す。

が、秋山の姿はない。

マルティネス「消えたぞ！」

マルティネス、穴を見上げてカメラ目線になる。

マルティネス「いったのか？！」

マルティネス「46に？！」
マルティネス「おい！　どうなんだ！」
マルティネス「そっちにいったのか！」
画面、暗転する。

○暗転画面
暗転画面に秋山の姿が浮かびあがる。
秋山「…気づいていないようだな」

以下、46階層の住人である？（??）、つまり視聴者と秋山のやりとりを想定した形でシーンが進む。

秋山「俺の存在を認識させるために一時的に穴を閉じた。暗くなったテレビ画面を見ろ。君の姿や部屋のインテリアと一緒に俺が映り込んでいるだろう。つまり、俺は今君の部屋にいるってわけだ」
暗転画面に映った秋山、にやりと笑う。
秋山「この階層までくると、もう画面越しで

しか俺を認識することはできない」
秋山「…状況を理解したな？」
秋山「半笑いはやめてくれ」
秋山、目をつぶる。
秋山「さあ。愛を叫んでくれ」
秋山「…」
秋山「…」
秋山「…」
秋山「…」
秋山、目を開ける。
秋山「…協力する気はあるのか？」
秋山「君が叫ばない限り、俺は次の階層にいくことができない。わかるな？」
秋山「わかったら協力してくれ」
秋山、目を閉じる。
秋山「…」
秋山「…」
秋山「…」
秋山「…」
秋山、目を開ける。

秋山「なんで叫ばない？」
秋山「半笑いはやめろ」
秋山「壁ドンをおそれてるのなら問題ない。もう殺した」
秋山、目を閉じる。
秋山「よし。叫べ」
秋山「…もっと！」
秋山「もっと！」
秋山「もっと！」
秋山「もっと！」
秋山「もっと！」
秋山「もっと！」
秋山「もっと！」
秋山「もっと！」
秋山、暗転画面から消える。
暗転画面、終わる。
画面にマルティネスの部屋が映し出される。

○マルティネスの部屋
マルティネス、落ち着きなく室内をうろ

ついている。
マルティネス「あれから二時間経った！」
マルティネス「今どんな状況だ！」
マルティネス「どこまで進んだ？！　恋人と会えたのか？！　あーどうなんだよ！」
秋山の声「…俺だ」
　マルティネス、はっとする。
マルティネス「声が！」
秋山の声「今、俺は最高層から君たちみんなに向けて声を届けている」
マルティネス「おお！」
秋山の声「君たちの協力のおかげで今年も無事恋人と会えた。デートも楽しませてもらった。運がよければ、君たちの世界に俺と恋人が奏でたミルキーレインが降るだろう」
　マルティネス、窓際にいく。
　マルティネス、小窓を開ける。
マルティネス「降ってるぞ！」
　マルティネス、窓の外に手を伸ばす。
マルティネスの手のひらにミルキーレイ

ン。

とろろみたいに白くねっとり。

マルティネス、手についたミルキーレインをティッシュで拭き取る。

秋山の声「俺は今から元の世界に戻る。戻るときは簡単だ。みんなの手を煩わせることなく、一瞬で済む」

マルティネス「そりゃよかった！」

秋山の声「みんな、本当にありがとう。また来年の七夕、君たちに協力してもらうかもしれない。そのときは頼んだぞ」

マルティネス「任せろ！」

秋山の声「では、さらばだ」

マルティネス「おう！」

マルティネス、机に座る。

マルティネス「…今日は実に不思議な一日だった。よし。明日の仕事の支度でもするか」

マルティネス、オーディオプレイヤーのスイッチを入れる。

TM NETWORK の曲が流れる。

マルティネス、書類の整理をし出す。
秋山の声「…う、う、うわあああ！」
マルティネス「なんだ？！」
と音楽をとめる。
マルティネス「おい！　どうした！」
秋山の声「…不測の事態だ。元の世界へ帰還するさい、魂の一部がどこかの階層で詰まった」
マルティネス「詰まった？！」
秋山の声「みんな、よく聞いてくれ」
マルティネス「みんな、聞け！」
秋山の声「今から一時的に穴を閉じる」
マルティネス「穴を閉じるぞ！」
秋山の声「その時、テレビ画面に俺の姿が映り込んでいれば、その階層に俺の魂が取り残されているということだ」
画面、暗転する。
○暗転画面
秋山のぐったりした顔が映り込んでいる。

ややあって、暗転画面、終わる。
マルティネスの部屋が映し出される。

○マルティネスの部屋
マルティネス、テレビ画面に顔を近づけている。
秋山の声「…どこかの階層で…俺の姿が映り込んでいたはずだ…俺を見た人は…返事をくれ…テレビに向かって大声をあげてくれ…」
マルティネス「(テレビへ大声で)俺のところは映ってなかったぞ！」
マルティネス、落ち着きなく部屋をうろつき回る。
秋山の声「…ダメだ…見たという返事がない」
マルティネス「何だって？！」
秋山の声「もう一度穴を閉じる…どこかの階層のテレビに必ず俺の姿が映り込んでいるはずだ…頼む…俺の姿を見た人…返事をしてくれ…魂がどんどん弱っていく」

○暗転画面

秋山のぐったりした顔。

○マルティネスの部屋

マルティネス、テレビ画面を見ながら、

マルティネス「やっぱり俺のところにはいないぞ！」

マルティネス、部屋をうろつく。

秋山の声「…見たと…返事があった」

マルティネス「おお！」

秋山の声「俺の魂が詰まってしまったのは…46階層だ…」

マルティネス「46？」

マルティネス、壁に貼られた「乃木坂45」のポスターを見る。

マルティネス、穴を見上げ、

マルティネス「お前か！」

とカメラ目線でキレる。

マルティネス「なんでもっと早くいわなかった！」

秋山の声「…46…愛の言葉を叫んでくれ…そうすれば…帰れるかもしれん…」
マルティネス「叫べ！」
秋山の声「…もっと」
マルティネス「もっと！」
秋山の声「…もっと」
マルティネス「もっと！」
秋山の声「…ダメだ…エネルギーが弱い…」
マルティネス「46！　ちゃんと叫んでんのか！」
秋山の声「…まだ一つだけ方法がある」
マルティネス「なんだ？！」
秋山の声「46 が思いを寄せている相手に…」
マルティネス「相手に！」
秋山の声「好きだと…」
マルティネス「好きだと！」
秋山の声「伝える…」
マルティネス「伝えろ！」
秋山の声「そうすれば…」
マルティネス「早く伝えろよ！」

秋山の声「45…」
マルティネス「45！」
秋山の声「黙れ」
マルティネス「黙れ！　あ、俺か」
　マルティネス、指でしっーとする。
秋山の声「…いるんだろ？　愛する者が」
マルティネス「（口ぱくで）いるんだろ？」
秋山の声「電話でも…LINE でも…何でもいい…伝えろ…愛の言葉を…」
マルティネス「（口ぱく）伝えろ」
秋山の声「…俺の魂はこれ以上もたない…頼む…今すぐ…告白してくれ…相手に不審がられたら…俺のせいにしていい」
秋山の声「…」
秋山の声「…」
秋山の声「…」
秋山の声「46 が覚悟を決めてくれたようだ」
マルティネス「よっしゃ。BGM を流してやる。好きなタイミングで告れ（と張り切る）」
　マルティネス、オーディオプレイヤーを

再生する。
スピーカーからTM NETWORKの「Get Wild」のイントロが流れる。
イントロの盛り上がりがピークに達した瞬間、マルティネスの部屋が光で包まれる。
マルティネス「（眩しさ）うっ！」
光、テレビ画面へ吸い込まれてゆく。

○ゆらの部屋
光が室内を包み込む。
ゆら、眩しさで顔をしかめる。
光、テレビ画面へと吸い込まれてゆく。

○立浪の部屋
光が室内を包み込む。
立浪、眩しさで顔をしかめる。
光、テレビ画面へと吸い込まれてゆく。

○飯田の部屋
光が室内を包み込む。

飯田、眩しさで顔をしかめる。
光、テレビ画面へと吸い込まれてゆく。

○秋山の部屋

秋山、倒れている。
室内を光が包み込む。
光、秋山の体に入り込む。
秋山、起きあがる。
秋山、自分の体を確かめる。
秋山、ほっと一息つく。
秋山「…46。君のおかけで助かった」
秋山、穴を見上げる。
秋山「46。また来年の七夕で会おう。その時は、君のラブストーリーの結末を聞かせてくれ」
穴、ゆっくりとしぼんでゆく。

（おわり）